慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	□會諸科學の統合研究について：Julian H. Stewardの理論に關する若干の考察
Sub Title	Toward an interdisciplinary approach of social sciences : a study of the theory of J.H. Steward
Author	十時, 巖周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1957
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.30, No.2 (1957. 2) ,p.42- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論說
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19570215-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會諸科學の統合研究について

——Julian H. Steward の理論に關する若干の考察——

十時嚴周

目次

I　序
II　スチュワード理論の特質
III　その理論構造——等時的構成
IV　その理論構造——繼時的構成
V　結語

I

未開社會の原初的融合のなかから近代の多樣性が分化し、それに伴つて社會諸科學の專門化が齎らされたが、その極端な專門分化主義によつて、社會の全體的認識はやがて次第にその困難の度を增してきた。個別的具體的認識に優れる專門分化主義に、未開社會の原初的融合狀態におけるような全體的認識を附與することと關連して、近時社會諸科學の統合研究が强く要請されている。この種の要請は、すでに幾多の問題領域において眞劍に考慮され、また多くの貴重な成果を育みつつある。

例えば、文化人類學、社會學、社會心理學の各專門領域においては、それぞれの學問的交流がとみに活潑となり、從來の專門領域に拘わることなく、自由な異種交合 cross fertilization がいまや生產的に行われつつある。つまり、「學問的境界や立入禁止の制札にはさして注意を拂うことなく、問題の導くままにそれを追究して行こうとして來たことは、別段不名譽なことではなくむしろ名譽である。」といつた傾向が顯著に現われてきたのである（The Science of Man in the World Crisis. ed. by Ralph Linton. 1945）。

ところで、本來それぞれの學問的背景や基盤の異る諸專門科學が自由に交流し得るためには、それにはそれなりの一つの共通のつながりを持たねばならないが、それぞれの專門領域における最近の構造機能的分析の方針が、その橋渡しの役割を果したのであつた（For a Science of Social Man. ed. by John Gillin. 1954）。

構造機能的分析を中核とする社會諸科學の統合化の氣運は、行動の科學 Behavior Science、或は人間の科學 Science of Man といつた名稱でもつて、活潑な活動を開始している。しかも、統合研究推進のための理論的探索が精力的におし進められ、文化人類學、社會學、社會心理學のそれぞれの理論體系は、相互に複雜に交錯している現狀にある。

例えば、孤立未開の社會から近代社會に目を轉じた文化人類學者は、現代地域社會、都市社會、國民性等の新しい問題領域の構造機能的研究に志向している（Peasant Society and Culture. by Robert Redfield. 1956）。或は、都市、農村、家族、人口等の個別的問題から社會階層、官僚制度、權力構造等の大衆社會の諸問題に目を轉じた社會學者は、地位と役割のシステムとしての社會體制の構造機能的分析に志向している（Class, Status and Power. eds. by Reinhard Bendix, Seymour M. Lipset. 1953）。また、社會心理學においても、集團內におけるロールの理論やパースナリティの研究に關して、隣接諸科學との交流による新しい研究領域が開拓されつつある。

かくて、社會諸科學の交流、統合化の氣運は、すでに無視し得ないほどに强力なものになりつつあり、この點に關する理

論上の整備は目下の一大急務とされ、また、統合研究の要請もすでに實踐の段階に持ちこまれている。

本塾大學院社會學研究科においても、米山教授を委員長とする九十九里濱漁村調査委員會のもとに實施されている「九十九里濱漁村綜合調査」は、同樣の趣旨に基いて、政治、經濟、法律、社會、民族、考古、心理の各專門領域の協力による綜合的研究を意圖してはじめられた。本調査研究は現在すでに最終段階に入つたが、それは、終始一貫して、同教授の Area Study に關する統合的研究の方針によつて實施された（米山桂三著「社會調査――勞働・工場・漁村」昭和三〇年）。本調査研究を通して、統合研究に關する幾多の貴重な經驗を得ることができたが、その點に關して、未だに解決されない多くのむずかしい問題が殘されている實情にある。

その意味で、こういつた問題を中心課題として取上げたスチュワードの理論構造には、考慮すべき幾多の問題點が發見される。そこで、本稿においては、まずスチュワードの理論構造を紹介し、その各々について若干の批判を加えながら、社會諸科學の統合研究に關する若干の考察を試みる豫定である。

なお、本稿の骨子は、本塾大學院社會學研究科博士課程における米山教授の研究會において討論されたものからなる。記して同教授の懇切なる指導に感謝の意を表する次第である。

II

Julian H. Steward 博士のこれまでの經歷は、次のように列記される。

1902.　Born in Washington, D. C.

1926.　M. A., University of California

1929.　Ph. D., University of California

1928–30. Instructer, University of Michigan
1930–33. Associate Professor of Anthropology, University of Utah
1935–39. Anthropologist, Bureau of American Ethnology
1939–42. Senior Anthropologist, Bureau of American Ethnology
1942–46. Director, Institute of Social Anthropology, Smithsonian Institution
1946–52. Professor, Department of Anthropology, Columbia University
1952– Graduate Research Professor, Department of Sociology and Anthropology, University of Illinois

氏はアメリカ人類學の優れてアメリカ的な傳統のもとに、その專門的訓練を經てきた。アメリカ文化人類學のオーソドックスな主流は、A. L. Kroeber を頂點とするいわゆる歴史主義人類學であるといわれている。それは、各文化の內容を丹念に記述する記述的科學を主體とするものであり、多分に藝術的な華麗さをその特色とする。

しかるに、氏の學問的性格は、記述的科學であるよりは、むしろ法則設定を主眼とする普遍化的方法への線が強い。その意味で、氏は、人類學者のうちにおいても、むしろ特異な學問的傾向をもつものとして認められているようである。（昨年度フルブライト交換教授として來塾された Gordon W. Hewes 博士の言によっても、氏の人類學界における評價は、むしろ社會學に近い學者である、との意見が強いようであった。なお、ここで、アメリカ文化人類學の主流につき、約一年間にわたり本塾において體系的な講義をもたれたヒューズ博士に深く感謝の意を表したい。筆者が文化人類學の正規の講座に接し得たのは、ひとえにヒューズ博士のそれによるものであった。）

ところで、オーソドックスな人類學の傳統に立ちながら、社會學その他の隣接諸科學にも強い親近性を示すスチュワードの理論構造は、その初期の著作から一貫して、文化の法則性追求のための、科學普遍化への途を辿ってきた。それらのうちから代表的な著作をあげれば、次のように記される。

1938. "Basin-Plateau: Aboriginal Sociopolitical Groups," Bureau of American Ethnology Bulletin 120.

1947. "American Culture History in the Light of South America," Southwestern Journal of Anthropology, Vol. 3.
1946-50. Handbook of South American Indians (ed.), Bureau of American Ethnology Bulletin 143. 6vols.
1950. Area Reseach: Theory and Practice. Social Science Research Council Bulletin, No. 63.
1953. "Evolution and Process," in Anthropology Today: An Encyclopedic Inventry, (ed.) by A. L. Kroeber, University of Chicago Press.
1955 (a) "Irrigation Civilizations; A Comparative Study," (co-aouther), Pan-American Union, Washington, D. C.
1955 (b) Theory of Culture Change: The Methodology of Multilinear Evolution. University of Illinois Press.
1956. "Cultural Evolution," Scientific American, Vol. 195, No. 5.

以上の諸著作を、その原典に當つてことごとく紹介することはできないが、その最も體系的な部分は、一九五〇、一九五三、一九五五（b）、一九五六の諸著作に、かなり組織的に展開されている。しかも、一九五五（b）には、初期の重要な諸著作が、新しい理論的展開のもとに再錄されているので、本論においては、前記の四つの著作を中心として、その所說を紹介する方法をとる。

Ⅲ

氏の理論體系には、考古學、歷史學、文化人類學、社會學、等の社會諸科學の、獨自の融合狀態がみられる。一人の學者の理論體系を、任意に解剖、分析することは至難の業であるが、いまかりに、スチュワードの理論體系を大きく分類するとすれば、それは、等時的 synchronic と繼時的 diachronic の二つの理論構成に分類できるであろう。もつとも、この兩者は相互に關連的に取扱われねばならないが、ここでは說明の便宜上、以上の二つに分けて考察することにし、まず、等時的理論構成について述べることにする。

氏は、文化の規則性を、機能的側面から等時的に探求することと、發展的過程から繼時的に探求することとの、二つの理論構成によつて體系化しようとする。等時的理論構成について問題となるのは、氏の一九五〇年の「地域研究（エリア・リサーチ）」の理論構造である。

Area Research

一九世紀以來の社會諸科學の極端な專門分化主義によつて、いろいろな弊害が惹起された。しかもそれは、社會の一面的、部分的認識においてますます精密となつたが、社會の全體的認識に缺けるところいよいよ大となつたのである。そこで、部分的認識の緻密さを保持しながら、しかも全體的認識においても優れる、新しい研究體制が要請されるわけである。

文化人類學は、もともと未開社會の研究に錬達してきたので、未開社會を一つの全體として把握する全體的認識の方法に優れてきた。人類學者は、未開社會の家族、親族、政治、法律、經濟、宗教等々のあらゆる側面について曉通し、それらの全體的機能關係に注目してきたので、社會諸科學の「何んでも屋」jack of all social science trades の役割を果してきた。ところが、未開社會の研究におけるように容易く近代の社會諸科學が人類學のうちに融合され、そのことによつて現代社會の全體的認識が可能になるとは、とうてい考えられないのである。社會諸科學の統合の中心點を人類學に求めることは、別段非難されるべきことではないとしても、それにはそれに適わしい理論上の準備が、人類學の側においても用意されていなければならない。

スチュワードは、この要請に答えて、「地域研究」の理論體制を展開する。

まず、地域研究とよばれてきた從來の諸研究を檢討する。それは第二次大戰を前後する、實際的戰略的必要のために行われた幾多の協同研究のうちから、自然發生的に形成されてきたものといわれる。それらの協同研究は、最初に明確な綜合的

理論體制があつたわけではなく、試行錯誤の過程のもとに、逐次相互の理論的觸發が行われ、遂には協同研究から綜合研究の段階へと發展してきたのであつた。そこで、これまで暗默のうちに培われてきた協同―綜合研究の方針を、改めて明確な理論體制のもとに位置づけようとする。

まず新理論體制の二つの基本線を確認する。㈠文化相對論 Cultural relativity と、㈡文化統體論 Cultural wholes である。前者は、文化の相對性を理解することによつて、理論のエスノセントリックな誤謬を防ごうとする。後者は、文化を一つの全體として理解しようとする構造、機能分析の立場をとり、法則設定の科學的性格を堅持しようとする。これは、相對論と普遍化論の巧妙な折衷である。著者はいう。「文化、社會および地域は、明らかに相違する傳統、歴史、パターンをもち、二つのものが、その全體性において、全く同一だということはありえない。がそれと同時に、異つた地域における同種の制度や行動類型が、全く同一であると證明することもできる。」(1950. p. 6)

次に、以上の基本方針を是認することによつて、㈠地域研究のユニットの性質、㈡統合研究の方法、㈢地域研究の理論と實際、㈣各地域調査を導く特殊問題、の四點について論じている。なおここでは、前の二つについて述べることにする。

地域研究のユニット

從來、大小さまざまの地域調査が行われてきたが、それらを、㈠地域社會、㈡リージョン、㈢ネイション、㈣文化領域、の順で擴がる相對的なキャテゴリーの連續として考察する。

(i) Community Studies

この名でよばれる從來の諸研究には、種々雜多な內容のものが含まれている。

この種の研究は、もともと人類學者が未開社會を研究する際に用いた諸方法がその根幹となつている。しかもそれを、現

代社會の研究に安易に應用した事例が多い。未開社會の研究の場合には、㈠民族誌學的、㈡歴史的、㈢比較學的、の三つの方法論上のアスペクトが考えられるが、それを現代地域社會に應用する際には、一般に次の二點で批判される。㈠現代社會は未開社會と質的に異るから、同じ方法の安易な適用は許されない。㈡歴史的、比較學的の二方法は、現代地域社會の研究に殆んど用いられていない（1950. p. 21）。

第一の批判は、現代地域社會を、あたかも未開社會のように、自給自足的な機能的全體として取扱つている點に向けられる。地域社會をローカルな枠組のうちに孤立させ、その限りの研究に滿足し、地域社會とそれを取卷く全體的社會との關係に目を覆つている。つまり、個々の地域社會を、それを取卷く全體的社會の單なるモザイクの一つとして、研究しているに過ぎないのである。この點の批判は充分に當をえている。從つて、次の問題は、より大きな社會のアスペクトと、そのなかに含まれる地域社會での現象と、その兩者を如何に關連せしめ得るかにある。

第二の批判は、從來の地域社會研究に歴史的考察の缺けている點である。取上げたとしても、その地の古老の情報による、せいぜい數世代以前の歴史に過ぎない。從つて、歴史上の基本的潮流や文化變動に關する見透しに、著しく缺けるところが多い。（なお、前記九十九里濱調査においては、本塾松本信廣教授を中心とする歴史班の專門的諸研究が、當調査研究の重要な部分を占めている。）

また、比較方法については、すでに述べたように、從來の諸研究の內容が種々雜多であるので、それらに共通する同一の比較單位を發見することはむずかしい。顯著な例をあげれば、次のように記される（1950. p. 26）。

R. S. Lynd and H. M. Lynd, Middletown in Transition, 1937——經濟的要素とその變化が與える社會生活への影響

J. West, Plainville, U.S.A. 1945——ライフ・サイクルを中心とする文化とパースナリティの問題

R. Redfield, The Folk Culture of Yucatan, 1941——都市化の影響のもとにあるフォーク社會の變容の問題

L. Warner et al, Yankee City Series, 1941～――階級構造の問題
Allison Davis et al, Deep South, 1941――人種關係の問題

以上のように、それぞれの關心點、强調點の相違するものは、相互に比較し得る妥當性をもたないのは當然である。

さて、以上の諸批判を通して、スチュワードは、地域社會の研究について、次のような提案を行う。

地域社會の研究は、基本的には、民族誌學的方法に準據するので、次の四點について、方法論的に再考する必要がある。

㈠調査對象選定の基準、㈡質的方法、㈢量的方法、㈣地域社會と全體的社會との脈絡（1950. p. 43）。

第一のサンプリングの點は、思いつきや、いきあたりばったりの選定方法を排し、その全體的社會構造から割出される一つの基準に基いて、調査對象を決定することである。（九十九里濱調査においては、沿岸および沖合漁業の保全に關する調査を目的としているので、同漁業の衰微が激しいといわれる九十九里濱全體の漁村が研究對象に選ばれた。しかも、九十九里濱沿岸の諸漁村のうちから、特に舊片貝町が調査對象に選ばれたいきさつは、それら諸漁村を踏査した後に、その漁業率、人口率等の水產指數を考慮した結果、決定されたのであった。）

第二の質的方法については、その地域社會の構造、機能的分析に重點が置かれる。あらゆる事實が丹念に蒐集され、その社會の深奥にひそむ價値體制およびその社會の基本的樣式を、すでに自明のものとしないで、改めて嚴密に再調査する。そうすることによって、調査におけるエスノセントリックな誤謬を避け、次の量化の段階へ妥當に到達することができるのである。

第三の量化の方法については、調査の目的その他の理由によって、一律の絶對的基準をつくることはできない。ただ、量化の方法は、飽く迄も質的深奥化の過程をへてから後に、初めて實施されねばならない。（九十九里濱調査においては、應用人

類學的アプローチをとる米山教授の調査方針に基き、過去五年にわたり、この質的方法の實施に重點が置かれてきた。そして、調査の最終段階に到って、質問紙法による量化の方法がとられた。）

最後の、全體と部分との關係の處理は、最も解決の困難な問題の一つであり、また、スチュワード理論の核心部をなすものである。その點については、後に詳しく具體的に說明する。

(ii) Regional Studies

リージョンの定義については、オーダム以來、社會學的研究の重要な概念の一つとされてきた。ところが、彼は、リージョンといわれてきたものを、文化人類學でいう下位文化領域 Cultural Subarea と、實は同じものであると考え、この問題を、文化人類學の流れのうちに再檢討しようとする。

文化領域 Cultural Area の概念は、文化人類學における貴重な遺產の一つである。それは、諸文化の內容を詳細に記述し、その內容の類同性によって、一つの領域を地理的に決定する概念である。ところが、ここでは從來のそれらの方法をのりこえて、一つの文化領域を一つの社會文化的全體 Sociocultural Whole として構造機能的に分析しようとする。同じ觀點から、下位文化領域を構造機能的に分析すれば、その上位と下位の關係は、地域社會の研究と同樣、全體と部分の關係およびその歷史的發展過程の問題に直ちに結びつく。ところが、リージョンに關する從來の多くの研究は、未だにこの問題の處理に成功していないと考えている。というのは、それらの研究の多くが、いまだに地域社會の研究のレヴェルで統合されているからである。そこで、彼は、リージョンの理解には、地域社會のレヴェルとナショナルなレヴェルの、兩方のレヴェルに働きかける諸制度の研究が必要であると考え、それらの諸制度に關する諸專門學者との統合研究 Interdisciplinary study を强く要請する（1950. p. 70）。

(iii) National Studies

ネイションの定義に關しては、政治學において幾多の論議がなされてきたが、彼は、その問題にはふれないで、極めて常識的にその概念を規定する。

ところで、彼が國家研究という場合、その研究は、國際關係からみた各國家の研究を中心問題としている。いうところの意味は、現代の諸國家は、國際關係から孤立して自給自足的な鎖國體制に安住し得るものではない、ということである。從つて、國家の研究に際しても、國家を取圍む國際關係を考慮することなしには、その妥當な研究は成立し得ないと考える。繰返しここでも、全體と部分の關係の操作が問題となる。以上が、國家研究についての、彼の基本的方針であるが、その方針の具體的展開は、從來の諸研究の批判、檢討のうちに見出される。

現代諸國家についての研究は、國家的レヴェルで機能する諸制度に關する諸科學に、分擔されて行われてきた。ところが、それらの諸專門科學の成果は、果して全體的視野のもとに綜合的に把握され得るであろうか。いいかえれば、人類學の綜合的認識が、國家研究に際しても、充分に活用され得るかどうかが問題となる。しかも、人類學は、もともとそういつた專門科學ではなかつたので、新しい要請に對する新しい諸條件の設定が、人類學の側に必要とされるわけである。

國家研究に對する文化人類學の努力は、㈠文化領域としての國家の研究、㈡文化とパースナリティ研究を通しての國民性の研究、の二つの方向を辿つてきた。前者は、類似の信仰、習慣、行動樣式、その基盤となる物質文化、家族構造、食物趣好、行儀作法等々の、いわゆる「文化の公分母」の構成因子を、各項目にわたつて丹念に記述することを主體とした。その場合、異質化した、しかも機能的全體の關係にある現代國家を、その構造と機能の觀點から全體的に分析することは稀れであつた。後者の國民性の研究は、その國の文化の全般的パターンに注目し、その國の國民のパースナリティと、その文化的環境との、兩者の相關關係を解明しようとする。その場合、この種の理論的オリエンテーションは、おおむね未開社會の研究を通して形成されてきたので、より複雜に異質化した現代諸國家に對して同じ方法を適用することには、かなりの疑問が

持たれている。（ルース・ベネディクトの「菊と刀」について幾多の批判がなされたのは、この間の事情を物語っている。）つまり、文化とパースナリティの研究を、現代國家の構造、機能的側面から、再構成することが、國民性の研究に要求されるのである。

ところで、以上のような現代國家に對する人類學的諸研究は、如何なる觀點からすれば、社會諸科學との統合研究に持ちこめるであろうか。この問題についてのスチュワードの見解は、極めて消極的である。僅に、國民性の研究を通して、人類學と心理學の一層の協力關係を期待し、未だ開拓期にあるこの若い學問の將來の發展を注目しているに過ぎない。その他、ナショナル・パターンの起源、構造、機能等について、他の專門諸科學との交流を意圖しているが、その具體的方法については、別段觸れるところがない。僅に、歴史學との接近を試みているに過ぎない。

次に Problem approach についても、同じ立場から、從來の諸研究を批判、檢討しているが、論が重複するので、ここでは取上げないことにする。そこで取上げられている問題は、國際關係、ナショナリズム、國家構造、イデオロギー體制、經濟變動、都市化現象、人種關係等の諸問題についてである（1950. pp. 85-94）。

統合研究の方法

スチュワードの理論構造は、一九五〇年の「地域研究」と一九五五年の「文化變動の理論」とでは、ややその用語を異にするが、その基本方針においては首尾一貫している。後者に用いられる用語が、より一層整備されているので、ここでの說明は、主として、後者のそれによることにする。

氏の理論構造の紹介に當り、まず、その基本概念としての、㈠個人、㈡社會、㈢文化、について、簡單な說明を必要とする。その理由は、社會科學を體系化するためには、共通基盤として現在かなり廣く用いられている三つの統合概念Integra-

ting concepts について、最小限度の相互理解が必要だからである。なお、この三つの概念は、相互に不可分の關係にあり、しかも、相互に混同することのできない關係にある。

個人は、その社會の一構成要素であり、その文化の擔い手である。一個人の社會、文化的行動の研究は、必ずしも心理學的實體としてのみ、取扱えるものではない。個人の行動の構造、機能的全體性を考察する場合、その研究は、個人を社會的實體として取扱う。同じように、個人の行動が統一化されるプロセスの研究は、社會文化的水準における問題であつて、單なる心理學的水準に止まるものではない。個人を中心問題として取上げる場合にも、また各種の方法がとられる。例えば、文化および社會がパースナリティに及ぼす影響を考察する場合、その主たる研究の關心は、優れて心理學的なものであるが、逆に、パースナリティの文化に與える影響を考察する場合は、問題はもつと複雜になる。その研究は、社會、文化的な諸條件のもとにおいて、より複合的な分析が行われねばならない。

次に文化と社會の關係について、文化の概念を「行動の學習された樣式」と考えれば、社會はそれに含まれる一部であり、「特殊のパターンをもつ特定の人間集團」である、と考えられる（1950, p. 98）。ここで注目されることは、スチュワードを含む一部の人類學者は「社會」一般といつた抽象的な社會の存在を否定し、社會はすべて具體的な特定の人間集團を意味する、と考えている點である。社會學者が社會一般についての理論構成を目論んできたことに對して、前記の人類學者の考え方は著しい對照を示している。

それはともかくとして、文化と社會を以上のように理解することによつて、次の方法論上の意味を掬みとることができる。文化は、それに所屬する諸々の社會の基本的オリエンテーションを示す機能をもつ。從つて、文化の變動は、直ちにその社會の廣範な變動を惹起する。逆に、社會の不斷の變動は、その文化の許容する限界においてのみ、可能となる傾向を示す。この間の事情は、野球のルールとチームの關係になぞらえて説明される。野球のルール（文化）が變化すれば、野球のチーム

（社會）は直ちに重大な影響を蒙る。チームの勝敗による變遷は、逆に、野球のルールには影響しない（1950. p. 101）。

かくして、文化の概念は、特定の具體的社會を研究する際の統合概念として用いられる。しかも、社會の概念は、前者と同一の系列に屬しながらも、それとは明確に區別されている。社會の變動の性質は、基礎的な文化によつて決定され、文化の用語によつてのみ効果的に取扱い得る、と考えられるのである。

さて、以上の統合概念を基礎として、次にスチュワード理論の中核をなす、㈠文化生態學、㈡文化核點、㈢社會文化的統合の水準、㈣文化タイプ、の四つの根本概念を説明する。

(i) *Cultural ecology*

文化生態學は「文化の環境に對する適應が如何に或種の諸變化を惹起せしめるかを確認するための方法論的用具」であると定義される（1955. p. 42）。環境の文化に對する効力を理解するための、開發的手段 heuristic device として用いられる概念である。

生態學 Ecology の概念は、本來生物學の領域において用いられ、生物體と環境との相互關係の研究をその主眼點とした。同じ方針は人間社會にも應用され、人間行動の地域的性格に注目する人間生態學 Human ecology が展開された。この新しい概念は、それ自體が目的であるのか、或いは、それは單なる一つの補助手段、または、操作用具として用いられるのか、その點について、極めて曖昧な用いられ方をしてきた。もし、單なる操作用具と考えるならば、それは、正反對の二つの目的に奉仕する矛盾に直面する。一方では、純粋に生物學的種としての人間の、發生學的變種と生物學的機能を理解しようとする、生物學的目的に奉仕しなければならない。他方、それは、環境への適應によつて受ける、文化の影響を理解しようとする、文化行動の解明の目的にも奉仕しなければならない。

しかるに、社會學の領域においては、文化行動の解明を問題としながらも、その分析用具は、飽く迄も生物學的性格から

抜け出していない。例えば、人間聚落 Human Community の現象を、competition, succession, migration の生物學的概念でもつて研究しようとしてきた。しかしながら、人間は、生物學でいうような發生學的に作られた生物學的裝置のみによつて、自然現象に反應しているのではない。むしろ、その問題は、文化の條件づけによつて形成されるパースナリティの構造によつて解明されるべき問題である。いわば、人間の社會は、文化の概念によつて研究されねばならない、といえるのである。

事實、近代國家におけるローカルな人間集團は、ローカルな適應現象によつて影響されると同じ程度に、よりナショナルな諸制度によつても影響される。從つて、そこで行われる生態學的適應は、その文化の影響によつて強く色づけされている。つまり、人間聚落の本性の分析は、文化、歴史的概念によつて導かれねばならない、といえるであろう。しかも、從來の歴史主義人類學にみられるような、文化現象の解明を歴史的方法のみに依存することも、亦、誤つた方法であると考えられるのである。

では、生物學的次元と文化的次元との差を、如何に處理すればよいか。人間生態學の多くの學者が、これ迄に幾多の努力を拂つてきたのも、けだしこの點に關してであつた。

スチュワードは、これに對し、全ての文化ー環境的狀況に應用し得るような一般原理を作ろうとはしない。むしろ、特定の文化のパターンの起源を解明しうる方法により強い關心を示す。また、從來の人類學にみられるような、全ての文化を文化から說明する方法とも異つて、それらの個々の文化を超越する、普遍的要因としてのローカルな環境的因子にも關心を示す。つまり、環境決定論と文化決定論との、兩者の極端な抽象性を否定し、限られた範圍において通用する適應過程の齊一性をば、個々の具體的現象のうちに發見しようとするのである。

以上が文化生態學の根本理念である。そして、その際の主要な姉妹概念となるのが、次にあげる「文化核點」の新しい概

念である。

(ii) *Cultural Core*

文化核點の概念は、「生存維持のための諸活動および經濟的手筈に、最も密接に關連する諸要點の全體的構成體」The constellation of features which are most closely related to subsistence activities and economic arrangements. (1955. p. 37) と定義されている。文化の全てのアスペクトは、相互に機能的に關連し合つている。その中から、特に相互依存關係の程度の、最も強く最も重要なものを抽出し、一つの典型を構成したものが、この文化核點の概念に相當する。それは、アプリオリ的に構成されるのではなく、經驗的基礎から出發し、經驗的に決定し得るような、社會的、政治的、宗教的等々の、いろいろのパターンを含むものである。例えば、現代社會に關しては、その文化核點を複雜なテクノロジーとみて差支えない(1955. p. 37)。

さて、文化核點の概念の說明を、一應以上の程度に止めておいて、次に、社會文化的統合の水準の說明に移る。

(iii) *Levels of sociocultural integration*

社會文化的システムを「構造と機能が、その文化遺產によつて決定づけられるような各種の諸社會」と定義する(1950. p. 106)。それは、經驗的基礎から出發した構成體であり、その特徵は、㈠文化的傳統、㈡或る特定の發展水準における、部分の全體に對する關係、の二點によつて決定される。その理由は次のように述べられる。人類學は、既に繰返し述べてきたように、小數、單純、獨立、自給、同質の諸特徵を示す未開社會を研究の對象としてきた。ところが、その後の研究の推移により、未開社會から現代社會へと近づくに從つて、從來の諸理論構造に幾多の改變を加えねばならなくなつた。その一つの現われが、この社會文化的システムの概念に相當する。その意味で、この概念は、社會の發展過程における一つの逐次的連續 continuum を示す。

ところで、社會の發展過程については、從來多くの學者の分類法が提起されてきた。しかしながら、スチュワードは、單なる分類のため分類法を提起しようとするのではない。彼の意圖は、相互に比較し得る共通の單位を設定しようとする方法論的用具を構成することにある。しかも、經驗的基礎から出發し、具體的に實證され得る範圍内にその分類法を止める。從つて、かつての一系的進化論者のように、アプリオリ的に設定された單なる論理的構成體ではなく、問題別に、具體的に考察し得るような諸レヴェルを設定しようとするのである。

水準設定の要件は次のように說明される。水準の設定によつて、それ以前とそれ以後が、質的に異る新しい統合性を示すような、そういつた一つの全體性が、各々のレヴェルにおいて構成されねばならない（1950. p. 112）。しかも、一つの水準を設定すると、その水準を、より具體的な下位水準に引下げて、調査研究の實施されることが望ましい。一例を示そう。Great Basin Shoshonean Indians は、氏の分類法によると、最も低位の家族の水準において統合している人間集團の一つである。彼等は、その生存のための環境と、それに利用できる技術との二つの條件――これを文化生態學的過程と呼ぶことはすでに述べたとおり――によつて、その各々の家族を相互に孤立させ、自給自足的に殆んど全ての文化的諸活動をその家族内で完了させることができる。しかも、時には諸家族の連合によつて、かなりの規模の共同狩獵が行われるが、そのことによつても、擴大家族、種族、村落、その他の、高位の水準で統合される社會文化的システムを促進するような恒久的な團結力を齎らす迄には到らない。そのような人間集團を、家族水準で統合している社會文化的システムとよぶ（1955. esp. chapt. 6）。

ところで、このような人間集團が、現代國家の統制、支配のもとに組入れられると、それは、いま迄とは異つた水準で統合されるように變化する。

社會文化的に統合した一つのシステムが、他の一つのシステムと接觸すると、そこには、二つのシステムの内的變化がひ

きおこされる。この現象は、文化變容 Acculturation として、研究されてきた。しかし、この分析方法は、項目主義、非動態的性格のために批判された。その批判に答えるために、スチュワードは、より動態的な方法を提起しようとする。

未開社會は、全體的社會としても小規模であり、また孤立していて統合の度合も強い。從つて、そこに生活する人間の諸行動は、一定の類型として把握することが容易である。もし、かかる社會が他の異種の文化と接觸すると、その各々の統合の强度、統合の水準の相違によつて、それぞれ獨自の文化變容を起すものと推定される。卽ち、異種の二つの文化が接觸、統合する過程は、それぞれの文化の構造、機能的側面において誘發される諸緊張によつて表現されるものと考えられる。

そこで、文化變容の問題に關しても、接觸以前の文化の狀態が如何なるレヴェルで統合されていたか、如何なる强度の統合がそこにみられたか等の諸點を考察することによつて、その後の文化變容に對する新しい理論構成の途を開く。

スチュワードがあげる三つの實例を紹介しよう。

前に述べた、ショショーニ・インディヤンは、他の諸インディヤンと異り、家族水準で統合していたので、白人との接觸においても、他のインディヤンとは異り、平易に葛藤もなく自由に白人社會に順應した。これに比較して、他のインディヤン、特に種族の水準で統合していたインディヤンは、種族共同體の集團凝結性によつて、各個人は容易に白人社會に順應することができなかつた（1955. pp. 56-58）。

インカ帝國がスペイン人に征服された時、そこに起つた文化變容は、次のことがらを示している。當時、インカ帝國は、統治機構が極めて完備していた。しかし、國家的機構とは別に、地域社會のローカルな獨自の生活類型が、前者と矛盾することなく並列的に存在した。卽ち、國家的統治機構とは別に、地域社會の水準で統合する社會文化的システムが、インカ帝國に存在していたと考えられるのである。そのような狀況のもとに、スペインの新しい支配者が侵入した結果、國家的統治機構に激變をひきおこしたが、社會文化的システムの低位の水準では、さしたる變化はおこらなかつた（1955. pp. 58-60）。

ところが、カリブ海周邊文化 Circum-Caribbean Culture においては、同じスペイン人の征服によつて、インカの場合とは全く異つた結果が生じた。征服當時、例えば、パナマ地峽のクンナ・クエバ・インディヤン Cuna-Cueva Indians は、精巧な國家組織を有していた。そこでは、全國にわたつて身分的上下關係が嚴密に規定されて、それぞれの階層の全國的な組織が存在していた。そこへスペインの支配者が侵入することによつて、それ迄の階層的序列が全面的に破壞された。その結果、クンナ・インディヤンはスペイン人の目のとどかないリージョンに移住し、そこで再び、地域社會を基盤とするフォーク社會の生活に逆轉した。その理由は、かつてのクンナ・インディヤンはナショナルの水準で統合されていたので、それを破壞されることにより、フォークの水準への Deculturation を起したのである（1955. pp. 60-61）。

以上、家族、地域社會、國家、の三つの水準でひきおこされた文化變容の實例を示した。しかしながら、現在みられるところの廣い意味での文化變容は、もはや、現代社會の社會文化的システムの分析なしには到底考えることはできない。その理由は、かくも異質化し複雜化した現代社會は、その下位文化と上位文化の不斷の文化變容によつて、特色づけられているからである。現代社會においては、諸行動類型は、人々、或は社會の特定集團によつて具體的に示される。しかも、その行動類型の構造と機能は、特定集團自體によつて影響される。從つて、その場合の分析用具となる社會文化的ユニットは、生物學的、心理學的および文化的現象に全的に還元しえない組織體のもろもろの水準を代表しているのである（1950. p. 108）。

これらの水準は、相互に關連して一つの組織的全體を形成しているので、現代社會の分析には、諸水準で行われる分析と、その全體性との關係の、兩者の綜合的分析が必要とされるわけである。

そこで、現代社會の人類學的研究について、スチュワードは現代社會の全體性を、㈠垂直的、㈡水平的、㈢公的諸制度、の三つのシグメントに分けて考察しようとする（1950. p. 115）。

まず、第一の部門は、地域社會、近隣集團、同一世帶集團、その他の特殊集團を含むローカルなユニットをさす。第二の

部門は、階級、職業、人種、その他の全國的に散在する同質的諸集團をさす。第三の部門は、貨幣、銀行、商取引、法律、教育、軍事、宗教、その他の全國的に機能する公的な諸制度をさす。

かくして、三つのシグメントに大別された社會文化的全體を、取上げられる個々の問題に應じて、それぞれに適切な三つの組合せから研究していこうとする。この基本方針の利點は、次のように述べられる。取上げられる問題が、三つのシグメントのどれに關連するかによつて、それぞれのシグメントの專門學者との間に協力關係を打立てることができる。つまり、社會諸科學の協同研究の體制を、やや圖式的に明示しているのである。なお、協同研究の具體的展開はまだ確固たる業績をあげているわけではなく、多くの經驗と試行錯誤によつて、この種の方法の將來の發展が期待されていると考えている(1950. p. 116)。(この點に關し、すでにレッドフィールド等により、その圖式的な性格と、現實はこの三つのシグメントに明確に區別できない點で、激して批判されている。なお、九十九里濱調査においても、三つのシグメントの餘りの複合性のために、スチュワードのいうような明解な協同研究體制の確立は、およそ困難な事柄であつた。)

かくして、統合水準の概念でもつて、スチュワードは現代社會に關する文化人類學的研究を、次の三點から再構成する。(一)幼兒訓練の結果としてのパースナリティ特性を、家族および地域社會の水準において考察する。(二)同一の國家的諸制度に參加する限りにおける、全人民の共通行動を考察する。但し、それから諸制度の影響力は、各社會集團によつて相違する。(三)コミュニケーションのマス・メディアの影響より生じる公分母を考察する。但しその文化的影響は、國家的規模において測定する方法をもたない。それは、下位文化のコンテックストにおいて機能する故に、各下位文化の精密な民族誌的分析から確認されねばならない(1955. pp. 49-50)。

この三點からの考察の方法は、前述の三つのシグメントの考え方と一致する。しかし、ここでも、その圖式的な性格は覆うべくもない。その點は、彼も明瞭に意識しているふしがある。「國家的文化は、多元的な諸側面をもつ。それを、その全

體性において研究するには、なお非常に多くの研究方法が用いられねばならない」(1955. p. 51)。（スチュワードは、昨年四月より、奈良縣天理市郊外の一農村部落の調査研究に從事し、同年八月下旬、一たん歸國した。同現地調査の參加者、本塾出身、松本幹雄氏によれば、同農村部落と日本のナショナル・レヴェルとの關係の操作について、スチュワードは極めて愼重な態度をとり、數カ月の調査によつて直ちにその問題に手をつけようとはしなかつたといわれる。この問題のむずかしさを雄辯に物語るものであろう。なおスチュワードの諸文獻に關し、松本氏より幾多の便宜が與えられたことを、あわせて感謝する次第である。）

次に、以上の根本方針に基いて、具體的に實施されたプエルト・リコの研究を紹介する(1950. esp. chap. IV, 1955. esp. chap. 12)。そこで、どのような協同研究 joint study が行われたか、或は、協同研究から綜合研究 multidisciplinary approach へ、綜合研究から統合研究 interdisciplinary approach へと、スチュワードの理想とするような調査研究が行われ得たか、どうか。注目したいと思う。つまり、地域研究の理論と實際を愼重に檢討しようというわけである。

プエルト・リコは、カリブ海に位置する西印度諸島の一つにあたり、現在、米領に屬す。人口二二〇萬。島内には土着インディヤン、ニグロ、スペイン系白人、米人等の多種多様の人種が生活し、その混血の程度も高い。

プエルト・リコの地域研究を實施するに當り、次の四項目にわたる基礎知識が必要とされた。㈠基礎的諸制度――基本生產物、經濟、貿易關係、法律體制、政治組織、政治的イデオロギー、それに關連する哲學および文化的諸價値、宗教的組織およびその教義、全體的社會構造、教育體制、㈡既存の諸調査研究、㈢言語、㈣文化の歷史。

現地調査の手順は、㈠島内踏査および地域社會の選定、㈡地域社會の研究、㈢地域社會と島全體との關係の分析、の三段階に分かれる。

地域社會選定の理論的基礎として、スペイン系文化の遺產、およびローカルな環境の、二つの要素を考慮する。つまり、文化生態學的諸條件を考慮に入れるわけである。それには、㈠生產の基本的差異、㈡土地使用および土地所有狀況、㈢地域

社會別人口數、の三點について資料を收集する。その資料に基き、四つ、或は五つの原則的なリージョナル・ヴァリエーションが發見される。その各々のリージョンに對して、それぞれ一つの地域社會を選定する。その結果、㈠砂糖黍生產——南岸、土地共同所有、大規模灌漑、機械化、勞働者、常割支配人、㈡砂糖製造——北岸、土地政府所有、工場政府所有、灌漑なし、機械稀少、勞働者、㈢コーヒ生產——西部山間部、スペイン系白人の集中的大土地所有、機械化の缺除、所有主對從業員の傳統的對人關係、㈣タバコおよび雜穀生產——中部山間部、土地小規模個人所有、の四つの社會文化的シグメントが、研究對象に選定された。それ以外に、主要都市、サンホアン市の上流階級の特殊研究が附加された。

調査の方法は、普通の民族誌學的方法がとられ、資料を整理するために、四〇の主要調査項目が定められた。調査技術は、直接面接、個人歷收集、參與者觀察、古老面談、古文書、記錄、文書等が用いられた。そして、調査の最終段階に到り、質問紙法による量化の方法がとられた。（九十九里濱調査においても、既に本書の出版される以前に、以上と全く同じ調査方法、調査技術が用いられた。）

現地調査は、また、歷史的アプローチによつて基礎づけられた。特に、一八九八年、當地域がアメリカの支配下に入つた以後の變化に焦點を合せながら、地域社會の研究が續けられた。

次に、第三段階の島全體の分析が行われた。社會文化的ユニットとしてのプエルト・リコは、㈠四つの社會文化的シグメント、㈡公的諸制度、の相互に依存する二種の部分として考察される。前者は、全體的社會構造を構成し、後者は、その社會の結合と規制の力を構成する。その意味で、前者は、インフォーマル・ローカルな、後者は、フォーマル・ナショナルな側面を現わす。しかも兩者は、明瞭に區別されるが、同時に、相互補完的關係として把握される。同樣に、前者は、ローカルな制度的行動を取扱い、後者は、制度の原則的特質の分析を擔當する。

以上の二點に分けて分析する利點は、次のように述べられる。㈠社會文化シグメンツを確認し、㈡統合研究への途を開く。

現地調査完了後、調査スタッフは、各々のシグメントの相違について、長期にわたり討論する。その相違の原因に關連して、文化生態學的諸條件を確認する。次に、それらの相違を認めながらも、それらを、同一の公的諸制度に關連せしめ、なおかつ諸制度についての專門諸學者と、その問題について、統合的な研究、分析を行う。

それらのシグメンツは、全體的社會構造を作りあげるために、㈠交易、訪問、娯樂等による各リージョン間の相互接觸、㈡諸地域社會にまたがる社會諸階級、等の幾多の方法によつて相互に關係する。

また島が一つの全體として規則されるのは、幾多の公的諸制度の結果によるものであり、法的、行政的システム、政黨、勞働組合、教育體制、教會組織およびその教義、軍隊、或種の組織的スポーツ、換金穀物および製造物の分配、貨幣體制、銀行組織、信用制度等が、それに相當する。これらの諸制度は、各地域社會に滲透しており底知れない影響を與えている。從つて、それら諸制度の影響力を無視しては、地域社會の研究は誠に不完全極まるものとなる。（この點に關しては、九十九里濱調査においても細心の注意が拂われた。しかしながら、これら諸制度の、九十九里濱における諸機能を丹念に追求することは、また非常に困難でもあつた。その原因は、制度的複合の程度によるものと考えられ、統合的研究としての九十九里濱調査は、日本における目下の調査研究の一つの限界點を示すものと考えられた。しかも、調査研究費その他の事情が許せば、この問題についての、より大規模な調査計畫の立案されることが期待されている。）

ところで、公的な諸制度の地域社會に對する影響は、それぞれの諸制度のローカルな表現をとる。例えば、全島經濟、國際市場、信用制度の源泉は換金穀物生產およびその取引として、婚姻および相續法は結婚および家族として、教育制度およびマス・コミュニケーション・メディヤは學校および學習として、政府の保健對策は病院、醫師、呪術として、それぞれ獨自のローカルな表現をとる（1955. p. 69）。しかも、兩者は明白に區別されるが、同時に相互補完的關係に立つ。

以上の相違は、また、次のように分析される。ナショナルな文化的業績は、フォーク社會のそれと明白に區別されるが、

兩者の間には機能的な關係が成立する。前者は最高度の知的、美學業績をさし、後者はフォーク社會の傳統的、定着的業績をさす。また、兩者の發生、傳達、機能は相互に相達する。前者は上流階級との關係において、後者は孤立的フォーク社會との關係において、それぞれ有意の分析が可能となる。

しかしながら、兩者は完全に斷絶した二つの異種體を意味するのではない。

ナショナルな類型は、上流階級のもつ獨自の下位文化として、歷史的にも他の階級とは異つた側面をもつ類型として理解される。そこでは、富の多寡、社會的地位の上下のみならず、ナショナルな諸制度との特殊の關係、權力構造における特殊の役割等によつても獨自の類型を保持してきた。また、地緣的條件によつて統合することは稀れであり、多分にコスモポリタン的である。そのことから、インタナショナルな、一つの上流階級文化、とよぶに適わしい獨自の文化を形成する。

ところが、マス・コミュニケーションの發達等によつて、ナショナルな文化的業績は、廣く中產階級、勞働者階級にも使用され得るようになつた。それは、服飾、趣味その他によつて、すでに經驗濟みのことである。かくして、兩者の關係は、斷絶から接近へ、接近から融合へ、の輻合過程を通して相互に機能し合う關係にある。

以上の機能的關係は、次に變動の側面から分析される。例えば、服飾の流行現象について、國際的な變化は、直ちにそれぞれの上流階級に波及し、それらはまた、上流階級から中產階級、勞働階級へと、下降の傾向を示す。

プエルト・リコの變動をとりあげる際にも、その變動は、プエルト・リコ內部において完結する問題ではない。當地での顯著な變動の經路は、サンホアン市に居住する上流階級が、北米合衆國に密接に關連している事實から分析される。

以上、プエルト・リコを一例とする、統合的地域研究の具體例を示してきた。その理想的な分析方法は、㈠文化の歷史、㈡諸地域社會の研究、㈢諸比較研究——(i)社會組織、(ii)超自然觀および教會、(iii)政府および政治的イデオロギー、(iv)經濟、

(v)社會化、(四)公的諸制度、(五)通文化的妥當性についての綜合と諸假說、の五つの段階にわけて考察される（1950. p. 147）。ここでは重複を避けるために、最後の項目についてのみ說明する。

地域研究は、すでに一專門科學たる資格をもつべきであると考えられている。そして、Area discipline は、文化の歷史、社會文化的シグメンツ、公的諸制度のローカルな表現におけるヴァリエーション、全島にわたる公的諸制度、についての諸研究を、綜合的に相互に關連せしめるための、一つのアプローチたるべきものと考えねばならない。そして、かかる綜合は、目下の段階では、想像もつかない程困難ではあるが、將來、この種の全般的理解の妥當な可能性を、われわれは開拓しなければならないのである。

しかも、問題は、プエルト・リコに限定しないで、同じような條件がみいだされる他の諸地域においても同じように妥當する、地域社會の文化的機能および變動に關する因果的解明のための、或種の假說の構成に努力しなければならない。そうすることによつて、地域研究はまた、普遍化的方法をとる法則科學の地位を獲得することができるのである。

次に、普遍化的方法展開のための、最後の中心概念、文化タイプについて、說明する。

(iv) *Cultural type*

文化タイプは「環境的適應に起因し、同一の統合水準を代表する、中核的な諸特徵の全體的構成體」である（1955. p. 42）。それは、別の言葉でいえば、等時的、機能的および生態學的諸要素よりひき出される文化的諸特徵と、特定の繼時的、發展的水準を代表する文化的諸特徵との、二つの關連枠に基く概念である。

文化タイプの概念は、次の三點から具體的に分析される。(一)社會文化的統合の水準、(二)技術と環境の相互關係より生ずる行動の類型、(三)當行動類型が文化の他の側面に影響する範圍、の以上三點を分析し、その點に關する類似の典型が成立する場合に、それを一つの文化タイプに分類し、その法則性の追求に向う。

この新しい概念の出發點は、次のように說明される。從來、文化領域といわれてきた概念においては、その文化內容のエレメントの類同性に注目してきた。しかし、各地域にわたつて同一のエレメントが發見されたとしても、各文化は、それぞれ異つた全體的構成體を示す。そこで、今度は逆に、或種の全體的構成體が、各地域にわたつて共通して發見される場合、そこには、各事例に獨立に作用する類似のプロセス、或は、因果的諸要因の存在することが豫想される。それは、フォームによる並行現象ではなく、機能が同一である並行現象の存在が豫想される。この點を、「形態的相違をもちながらも、機能が同一な並行現象」として、form and function の概念によつて補强する（1955. p. 91）。しかも、その因果的規則性は、文化の全體的內容を含んでのことではなく、それに含まれる特定部分についてのみ、その存在が主張される。この特定部分が前述の文化核點に相當する場合、しかも、同一水準において統合する社會文化的システムの場合、それらの規則性は、一つの文化タイプを形成する。

要するに、文化タイプの概念は、文化核點の構造機能的典型概念を用いることによつて文化相對主義の行詰りを避け、社會文化的統合水準の概念を用いることによつて生態學的決定論の誤謬を回避しようとしている。

文化タイプの具體例を示そう。

次の諸種族は、スチュワードの理論構造によれば、一つの文化タイプ――「父系種族」Patrilineal Band を形成する。アフリカのブッシュメン、ニグリート、マレーのシマング、フィリッピンのニグリート、オストラリヤ土人、タスマニヤ土人、南米のオナ族、パタゴニヤのツエルシエ、カリフオルニヤ南部のインディヤン等々の諸種族は、世界各地に散在しそれぞれ獨自の文化內容をもつ。ところが、その各々の環境、食糧源、食糧獲得手段、必須的社會協力、人口密度、社會的政治的統制、宗教の機能的役割、戰爭、等の諸要因を考察すると、それらの諸種族にまたがる類似の㈠生態學的適應と、㈡統合の水準とが發見される。

それは、次のように説明される。㈠人口密度の稀薄性は、散在する稀少野性食物源とそれを狩獵採取する技術のためにひきおこされる、㈡環境は、その主要食糧源が狩獵に依存しその獲物が非移動的、散在的である。從つて、その環境におかれた人間は、その生誕の地に止まる方が有利である。㈢交通の手段は、人力に限られる。㈣文化、心理的事實として、相互に密接に結合する親族集團が近親相姦のタブーを生物學的家族から擴大家族に迄擴張して當てはめる結果、集團外婚制を必要とするに到る點が指摘される。しかも、この文化、心理的事實は、ローカルな適應現象によつては説明できない。以上四點の中核的な諸特徴から構成される一つの文化タイプを、ここでは「父系種族」とよぶ。

この文化タイプにおける四つの特徴は、また、次のような構造、機能的關連を示す。獲物の散在、貧弱な輸送能力、人口の一般的稀薄性のために、平均五〇人或は六〇人、または最高一五〇人の諸集團は、社會的團結を維持するための充分な且有効な協同活動、相互結合を行うことができない。各種族は、一定の土地を傳統的に使用する諸個人から構成される。その傳統的な土地使用は、土地所有の考え方を導く。從つて、他人の土地を侵す場合、そこに葛藤が激化すると、他の家族、或は血緣關係の諸家族と連合するようになる。そこで、人間は、自分の生まれたなじみ深い土地に留まろうとすれば、父方の系譜を辿る血緣關係の諸家族を一つの種族に發展せしめ、彼等の狩獵源を力を合せて防衛しようとするようになる。かくして、それらの地帶は、諸「父系種族」によつて、分割されるようになる（1955. p. 135）。

ところで文化タイプについて、一つの實例を紹介したのであるが、それ以外に、家族の水準で機能する社會とか、親族組織と身分集團の組合せが共通する社會とか、そういつた多數の文化タイプの構成の可能性が考えられる。そして、最終の分析においては、「文化タイプの學問的意義は、世界中のあらゆる資料を基礎とする限りより有意義になり、その廣範な比較研究によつて、通文化的に起る構造、機能的關係をますます明らかにしていく」のである（1955. p. 99）。

かくして、等時的、機能的理論構成は、それに對する各種の批判を含みながらも、一應これ迄に説明されたことになつ

た。そこで、次には、繼時的、發展過程的理論構成について說明する。

Ⅳ

スチュワードは、文化の規則性を、巨視的にその發展過程から考察し、それについての繼時的理論構成の可能性を問題とする。その場合、問題の提起は、これ迄の一系的進化論との對立の形をとる。一九五五年の「文化變動の理論——多系的進化論に關する方法論」が、それである。

The Theory of Culture Change

今世紀以來の文化人類學における反進化論的傾向は、いまや、一つの反省期に當面している、とスチュワードはいう。かつての一系的進化論の誤謬は覆うべくもないが、その後の個別的、普遍化的の諸研究によつて、再び、別種の進化論的理論の展開が可能となつた。しかも、そのことによつて、記述的歷史主義に墮した文化人類學を、再び、法則の科學、普遍化的方法に基く科學にひきもどすことができると考えられる。それが、彼の主張する多系的進化論の骨子である。

多系的進化論は、㈠一系的進化論、㈡普遍的進化論、の二つの理論の批判を通して展開される。前者は、タイラー、モルガンに、後者は、ホワイト、チャイルドによつて代表される理論である。

ここでは、その批判の論據を辿ることは省略し、多系的進化論の基本的性格を示すに止める。

まず、進化論という言葉によつて表現される意味に、一つの條件を附す。彼のいう進化論は、全世界的な宇宙的な規模の法則に關心を示すのではない。むしろ、限定された範圍で反復されるフォーム、プロセス、ファンクションに關心を示す。次に以上の條件に基いて、進化論は、等時的機能的であれ、繼時的過程的であれ、或はまた、多數の文化にわたるものであ

れ、少數の文化にわたるものであれ、それらの全ての場合の科學的普遍化と方法論的に關連する（1955. p. 19）。つまり、彼によれば、進化論は、あらゆる問題についての構造、機能的分析に外ならない。從つて、前に紹介した「父系種族」の研究も、實は、彼のいう進化論の研究の一部に外ならない。またその意味で、彼のいう進化論の理論構造は、これ迄に說明してきた理論構造と何等變るところがない。唯、研究對象を、地域研究から歷史的過程の問題に移し變えたに過ぎない。

多系的進化論の系譜は、次のように要約される。文化人類學は、一九世紀後半において一系的進化論を、二〇世紀前半においては文化相對論を、それぞれの主流として發展してきた。前者は歷史の復原を、後者は歷史の特殊性を、それぞれの中心問題とした。分類法 Taxonomy については、前者は普遍的發展段階を、後者は文化領域を中心概念とした。その性格については、前者は演繹的、アプリオリ的、圖式的、哲學的であり、後者は現象學的、藝術的であつた。ところが、兩者の諸研究は、次の方法で統合される。文化現象には、形式、機能、過程において、或種の類似性がみられる。それらの類似性は、文化タイプの典型概念によつて、新しい分類法に吸收される。この新しい分類法によつて、文化についての限定された法則、諸規則性が解明される。それを多系的進化論 *multilinear evolution* とよぶ（1953. pp. 324-325）。

つまり、多系的進化論は、一九世紀の進化論と、二〇世紀の相對論との、辨證法的展開といえないだろうか。

次に、その具體例を示そう。

エジプト、メソポタミヤ、インダス峽谷、中國北部、メキシコ峽谷、ペルー北岸、の六個所に存在した初期灌漑文明を一つの文化タイプに分類する。その理由は、こうである。以上六地點におこつた歷史的現象は、各々の文化生態學、文化核點、社會文化的統合の水準において、顯著な類似性を示す。しかも、その發展過程において、極めて類同的な三つの段階が見出される。

最初の段階は、原始的な集團が、河ぞいの濕潤地帶、或は降雨量の多い臺地において、食用植物を耕作し始める。そし

て、小規模の定着的村落を構成する。以上を Incipient Farmers の段階と名附ける。

次の段階では、人々は、運河の構築により河水を利用して灌漑を始める。灌漑耕作により、人口扶養量が增大し、主食生産以外の生産に從事する時間的餘裕ができる。その結果、運河の機構は擴大し、手業が發達する。この時期に、織機、金屬、車輪、數學、曆法、文學、記念物建築、宗教的建築、見事な藝術作品が齎される。灌漑工作が擴大されると、そのための協力體制、管理統制が必要となる。その結果、支配階級、官僚制度が發生する。彼等の權威は、主として、宗教的制裁力に基因する。廣大な地域に及ぶ權威の集中化によつて、國家が發生する。灌漑國家がその絕頂に達したのは、メソポタミヤでは、紀元前三〇〇〇年、エジプトでは、ややその後、中國では、紀元前一五〇〇年から二〇〇〇年、北部ペールでは、紀元前五〇〇年から紀元五〇〇年、メキシコ峽谷では、ややその後、の間にかけてであつた。以上の段階を Regional Florescent と名附ける。

第三の段階では、河水利用と生產量が限界に達した諸神政國家が、近隣の諸國家へ侵入略奪に向う。そこで、諸國家は一大帝國に膨張する。その場合、人口數が增大したに止まらず、施政、管理の方法においても、質的な相違が生ずる。法律は法典化され、官僚制度は發達し、强大な軍事體制は强化され、それらの上に權威は强大化する。この軍事的諸帝國は、メソポタミヤではスメリヤン王朝に、エジプトではピラミッドを作つた初期王朝に、中國では周時代に、メキシコではトルテックとアズテック王朝に、ペールではティアウアナカン時代に、相當する。ところで、それらの諸帝國の富は、生產量の增大よりも、むしろ、强制的徵稅に基いていたので、常に內亂の危機に見舞われていた。打續く內亂、灌漑組織の破壞、生產量の低下、人口の減少等による暗黑時代が始まる。征服と反亂が繰返して行われる戰國時代が續く。以上を Empire and Conquest の段階と名附ける (1956. pp. 57–76)。

さて、以上の類似の三段階を經て形成された初期灌漑文明は、神政的軍事的階級によつて支配される絕對主義國家によつ

て構成された。これが、そのフォームである。また、それら諸帝國の基本的ファンクションは、水利の統制事業、その他の國家的事業に集中された。以上のように、同一のフォームと同一のファンクションを、各々が獨立に發展せしめている時、それらは、一つの文化タイプに分類することができる。しかも、それらは、同一の發展過程を辿つたことにより、一つの進化論的解釋として、實證的な妥當性をもつ。なお、この點に關して、スチュワードは、以上の一つの文化タイプの構成を未だ一つの試論に過ぎないとして、その適用限界を、嚴密に初期文明の六つのセンターに限定する。つまり、全ての人間文明が同じ經路を辿つて進化したとは考えてはいない。事實、日本と封建制ヨーロッパにおいては、初期灌漑文明のタイプとは違つた發展のラインを辿つたと考え、むしろ、親族集團から多元的地域社會國家へのラインを辿る封建國家のタイプを豫想している（1956. p. 76）。

かくして、現在利用できうる限りの資料を驅使して、スチュワードは、人間進化の五つの別種のラインを設定する。それは、㈠土着狩獵種族における父系種族、㈡ゴム樹液採取者と毛皮採取獵人、㈢騎乘者による略奪的種族、㈣封建諸國家、㈤初期灌漑文明諸帝國、の五つの文化タイプである（1956. p. 74）。その各々についての說明は省略するが、それらは、それぞれに固有の文化タイプを構成し、且、世界的規模において發見される。しかもなお、將來の諸研究によつて、かかる文化タイプの他の幾多の構成の、より精密な體系化を期待している。そのいうところの意味は、人間進化に關する全ての理論が構成されたというのではなく、人間進化に關する多系列の諸理論の構成が、いまや、その端緒についたということである。彼は、以上のように、限定された事實に關してのみ通用する、諸々の法則を追求しようとした。そして、「全ての材料が揃うのを待つた上で、はじめて理論を構成すべきだと考える必要はない。現在利用できる限りの資料でもつて、それによりかかり得るような、試論的構成を行えばよい」と斷言し、現在の人類學の主流を占める「事實の收集それ自體に終るような學問」に、強い反撥を示す（1955. p. 209）。そして、事實というものは、理論に關連せしめ得る限りにおいてのみその存在價

値があり、また理論というものは、單なる事實によつて打破られるものではない。事實をよりよく解明するための新しい理論によつてのみ、理論の存在價値が脅かされるのであると主張する。つまりスチュワードは、事實のみに關連する批判、或は、よりよき理論の構成を提起できないような批判に對しては、本書（1955）に關する限り、何等の關心も示さないであろうと豪語する（1955. p. 209）。そのことの是非はともかくとして、自己の理論構造に對する自信の程は、けだし當るべからざるものがあろう。

スチュワードは、目下、水田耕作についての通文化的な研究を計畫し、個人では最高の額といわれる研究援助資金を受け、世界の代表的な水田耕作地帶を數ヵ所選定し、大々的な調査プランを立案中であるといわれる。日本もその調査地點の一つに選ばれ、同研究計畫の豫備調査が、この春以來、奈良縣の一農村部落で行われてきた。そこで問題となつたのは、水利灌漑といつた文化生態學上の諸條件と、小農、長子相續の歴史的社會的諸制度と、現代資本主義經濟の滲透による換金生産制度との、三つの點の相互の關連性についてであつた。同研究計畫の將來については、未だ何らの豫斷も許されないが、そこでも、彼の理論構造に基く一つの文化タイプ――水田耕作文明――が、その研究の中心課題となるであろうことは疑いもないところである。そして、研究對象が、現代文明の複合性に近づけば近づくほど、彼の理論構造の具體的展開も、ますます困難な障害に直面するものと考えられる。

最後に、彼の理論構造に對する、諸學者の若干の批判を附け加えることにする。

V

スチュワード理論で問題となつたのは、全體と部分の關係を操作する等時的理論構成および文化の變動を巨視的に取扱う多系的進化論の二つの點であつた。

前者については、社會文化的システムおよびその統合水準を考慮することによつて、全體的視野のもとに個を取扱い、個と全體の機能的關係に注目してきた。その操作は、同時に、社會諸科學の統合研究への一つの途を示唆している。

後者については、文化生態學、文化核點、文化タイプの諸概念を驅使し、相互に比較檢討し得る共通のユニットを開發することによつて、文化變動についての限定的な諸進化ラインを追求してきた。

この兩者の理論構成は、相互に關連づけられて一つの理論構造を構築している。つまりそれは、文化の構造機能を分析し、文化の變動を解明するための、普遍化的法則追求の一つの方法を提起している。

スチュワードに對する批判は、大別して、二つの觀點から提起される。㈠典型分析それ自體に關する批判、㈡典型分析の具體的展開に伴う現實的諸缺陷についての批判、がそれである。

前者については、更に二つの意見に分れる。典型分析に基く諸方法へつねに疑惑の目を向ける傳統的歷史主義人類學派の批判、および、典型分析の方法を一應承認しながらもその典型構成の妥當性に關してなされる批判、がそれである。前者についての論議は、科學觀の相違に根ざすものであるからここでは繰返し述べない。後者に關する若干の論議を紹介する。

文化核點の概念に關し、それに最も密接に關連する生存維持のための諸活動として、一體何を選ぶべきか。この點についてのスチュワードの態度には、極めて恣意的なものがみられるとオプラーは批判する（Book Review by M. E. Opler, American Sociological Review. Vol. 21. No. 3. 1956. p. 388）。選擇基準およびその選擇基準の妥當性は何か。その點に關するスチュワードの說明は、彼自身の主觀的判斷に基く具體的調査事例しか與えていない。つまり、客觀的な基準が示されていないのである。もし客觀的基準が明示されないとすれば、文化核點に關する諸要素を主觀的に選擇することによつて、次に追求されるべき統合水準および通文化的な規則性を、前以つて決定することと同じことになる。從つて、多系的進化を、家族の水準その他の五つの文化タイプに類別したことも、それは、實は、全くスチュワードの主觀的判斷に過ぎないものと思わ

れる。そして、オプラーは、現在の社會人類學の歴史學派と普遍化的學派の、二つの學派の統合を試みたスチュワードの努力を高く評價しながらも、彼が文化における價値の相對性および文化變動において果す個人の心理學的役割を輕視した點で、一種の環境決定論、經濟決定論に陥つたことを批判する（Opler, Ibid.）。

次に典型分析の具體的展開に伴う諸批判として、現代社會の社會文化的システムを、三つのシグメンツに區分することの是非が、論議される。前にも述べたように、その圖式的性格に關しては、既に幾多の批判がよせられている（Robert Redfield, Peasant Society and Culture, 1956. p. 42）。われわれも、九十九里濱調査において、その點に關する批判を行つてきた。そして、この問題については、いまなお解決しなければならない多くの障害に取りかこまれている。

われわれは、このつぎの問題に進まねばならない。その意味で、本稿は、新たなる出發への一つの礎石と考えたい。

（一九五六・一〇・五）

附記　本稿は慶應義塾學事振興資金にもとずく研究の一部である。